



## コミュニケーションとは何か

沖縄キリスト教学院大学  
人文学部長 ランドルフ・H・スラッシャー

沖縄キリスト教学院大学人文学部に開設された学科の名称が“英語コミュニケーション”である以上、コミュニケーションとは何かということについて、明確に理解することが極めて重要となってくる。コミュニケーションについての伝統的な考え方は、シャノンとウィーバーによって、かれこれ60年も前に提示された。彼らのモデルによれば、コミュニケーションには“送り手”と“受け手”があり、送り手は、伝えたい情報を“記号化”し、それを何らかの媒体を通して受け手に送る。受け手は、その記号化された情報を一定の規則に従って元の情報に変換、すなわち“復号化”する。これを言語コミュニケーションの場合にあてはめると、送り手は、自分の考えを、例えば英語のような言語に“記号化”し、その記号化されたメッセージを、空気を通して、受け手に送る。受け手は、その記号化されたメッセージを英語に変換し、もともと送り手の頭の中にあつた考えを受け取るということになる。

少し考えて見れば容易に分かることであるが、実はこのモデルは人間が行う実際の言語コミュニケーションを十分に説明できないのである。例えば、同一の言語を母語として話す二人の人間、すなわち二人のネイティブ・スピーカーの間のコミュニケーションを考えて見よう。もしこの二人のコミュニケーションがうまく行かなかったとしたら、メッセージの送られる媒体に何らかの問題があったからだということになる。そもそも、ネイティブ・スピーカーとは、その言葉の定義上、その言語の“記号化”、“復号化”の完全にできる人間のことであるから、これ以外の理由が考えられるはずはないのである。ところが、媒体の中を流れるメッセージに何ら問題がなくても、会話におけるコミュニケーションの障害は実際たびたび起こるのである。

「あなたの言っていることがわかりません」、「あなたの言いたいことが理解できないのです」という言葉をしばしば耳にする。相手の“言葉”は完全に理解しているにもかかわらず、相手が伝えたいと思っている“意味”が理解できないのである。コミュニケーションには、復号化、つまり“言葉”を理解すること以上のものが含まれているからだ。旧来のコミュニケーション・モデルは不十分なものであると言わざるを得ない。

まさにこの点に、スペルバーとウィルソンが「関連性理論」という新しいモデルを提案した理由がある。彼らによれば、コミュニケーションの成立には、単に言語記号の“復号化”ばかりではなく、復号化された言葉の意味を推察する、推し量る活動が不可欠なのだ。日常のコミュニケーションにおいて、我々はそれとは知らずに絶えず推察・推量を行なっているのである。「お兄さんはご在宅ですか？」という私の質問に、相手が「兄はもう仕事に出ました」と答えたとする。「兄は家には居りません」ということが彼の答えであることを私は推察する。「兄は家には居りません」と明示的に答えてくれているわけではない。しかし、もし仕事に出れば、もう家には居ないのだ、と私が推察することを相手は期待しているのである。

相手の言葉の一字一句を理解していながら、「言っている意味がよく理解できないのです」と言うことがあるのは、ここに原因がある。同じ質問に、相手が「今日は火曜日です」と答えたとする。こうなると、相手の言っている意味を理解することが極めて困難となる。一体、彼の兄は家に居るか、居ないのか。彼の兄が火曜日には出勤すること、しかも、その質問をした時刻にはまだ勤務中であることを私が知っていると相手が考えていたら、彼の兄は在宅していないということになる。火曜日は彼の出勤日ではないことを私が知っているはずだと相手が考えていたら、彼の兄がその日仕事に行く必要がないこと、それゆえに家に居るはずであると私が推察することを期待しているはずだ。このように相手の期待に添うような推察が出来ない場合には、コミュニケーションは不調に終わり、意思疎通ができないことになる。

このような考え方、すなわち単に言葉を理解するばかりでなく、それらの言葉の背後にある“意味”を理解することが必要であるというコミュニケーション観に立てば、我々の使命は英語という“言葉”を教えることだけではないことが明らかになる。我々は“言葉”を超えたものを教えなければならないのである。正しく推察する能力を一人ひとりの学生が養えるよう背景的知識を豊かにする工夫もしなければなるまい。“Doubting Thomas (疑い深い人)”や“The handwriting on the wall(出来事の前兆)”という言葉の意味を知るためには聖書の知識も必要になる。“意味”を推察するためには、歴史、文学、更に自然科学の理解を深めることも要求されるのである。

(比嘉訳)



## 「医療におけるディスコミュニケーション」

英語コミュニケーション学科教授 伊佐雅子

最近、「医療コミュニケーション」という分野が注目を浴びている。医療コミュニケーションは医者だけの問題ではなく、看護婦や薬剤師や栄養士や、療法士やレントゲンや生理検査の技師や、医事課や会計など、病院内すべての職種や部署において、コミュニケーション技法やスキルが大切であると言われている。この背景には、医学は細分化され、医療は日進月歩の勢いで急速に進歩している現状がある。そのため、病気診断の過程においては、我々の体は、一層細やかな細胞レベルで観察され、さらに血液データの数字やCTスキャンの写真で判断、判別される。そこに至っては、もはや、ひとつの統合された人格、人間を思い浮かべることすらできないという(町田いづみ & 保坂隆『医療コミュニケーション入門』より)。極端に言えば、医者は患者の顔を見なくても、また話を聞かなくても、病気を診断することが可能となる。

この夏、久しぶりに人間ドックを受けた。今回は看護婦が名前を確認し、検査の内容や方法を詳しく説明してくれたので、安心した。

だが、医者が高度な技術を駆使して診察する場合は戸惑いを感じた。特に、超音波による消化器検査では医師はコンピューター画面を終始、凝視しながら「息を吸って、出して、お腹を膨らまして」と指示を出した。途中、「ああおかしい。ちくしょう」と叫んだ。ベッドに横たわっていた私は驚き、医者がコンピューターゲームに熱中しているかのように感じた。この場面では、医者と患者とは物理的に近い距離にいるのにかわらず、対面でのコミュニケーションがないため、距離を感じる。解剖学者の養老孟司氏は、医者は人間をモノ(肉体)としてみる傾向があるので、患者と向き合って話をするのが下手なのではないかと述べている。これでは、真剣に病と闘っている患者に生きる勇気を与えることができるのであろうかと思う。

最近のめざましい医療の進歩は人間の体の内部を解明し、従来の問診・触診ではわからなかった病気を早期に発見することに貢献した。だが、進歩にはマイナス面もある。医師はコンピューター画面の技術的操作に心を奪われ、患者との重要なコミュニケーションの機会を失っているようだ。さらに深く考えてみると、ここには人間の経験の重要な変化が

みられる。従来の触診では聴覚中心の世界であるが、最近では機器中心の視覚優位の世界へと変身している。比較文明・文化学者のJ. ゲブサーによれば、聴覚志向の世界は人生の音のリズムに調和するが、視覚志向の世界は自分と他者の間に完全な分離が成り立つという。言い換えれば、視覚優位の人たちは他者と協調するよりも、自我意識が強くなり、その結果、他者との関係性が希薄になるのだ。

現在、医療現場では「患者中心の医療」に向け、主治医以外の専門家から意見を聞く「セカンドオピニオン外来」が広がっている。手術や薬の多様な選択肢から患者にあった治療法を助言するばかりではなく、主治医とのコミュニケーションの問題についても相談を受けている。先週、「言葉を尽くし医を尽くす」というテレビ番組で、外科医として、また、セカンドオピニオン外来の医師として九州中央病院（福岡市）に勤務されている杉町圭蔵先生のことを知った。先生は一流の外科医として、常に最先端の医療技術を追い求めながらも、技術だけでは救えなかった自らの経験をもとに、この仕事を始められたという。医者は「言葉の重み」を実感し、時間をかけて相手の心の動きを考えながら話さなければいけないという。言葉はコミュニケーションの手段としてみられるが、実は周りの世界を一変させるほどの力、つまり、人の人生を変えるほどの力を持っている。これは、医療関係者のみに期待されていることではなく、我々の日常生活においても当てはまる。最近は携帯メールやEメールでいつでも誰とでもコミュニケーションができるようになった。だが、問題は相手の立場を考えて発信しているかどうかである。謙虚に人と向き合う中で発する言葉の重みについて再認識してほしい。（いさまさこ）

## 図書館奨学生を終えて

保育科2年 大野 舞

私はキリスト教短期大学に入学してから、図書館奨学生として図書館で奉仕活動をしています。

高校の頃までは、図書館という場所にはほとんど縁がないような私でしたが、大学2年間はほぼ毎日のように図書館で過ごすようになりました。

図書館には、読書をしたり、課題をする学生、授業の資料を探す先生方、時には卒業生や学外の方など、毎日多くの人達が訪れます。静けさの中にも人の活動があるというそんな独特の雰囲気には私は魅力を感じるようになりました。そして、図書館は私に多くの本だけでなく、図書館を訪れる多くの人達とも出会わせてくれました。

私にとって図書館とは、勉強をしたり、読書をしてリラックスする場だけではなく、本を介して人とのコミュニケーションの場となりました。（おの まい）

## 青春時代と図書館

英語科2年 名嘉 愛音

「ねえねえ、図書館行こう!」「いいねえ、行こう行こう♪」これが私と友達との合言葉のように、私たちは毎日の様に図書館を利用しています。グループ学習、宿題、テストと、勉強に追われながら過ごしている学生生活を支えてくれているのは、図書館といっても過言ではないと思います。

本を読むことが私にとってどういうことなのかと考えたとき、それは、毎日の生活をより良いものにするように、必要な知恵や情報を取り入れる為のものだと思いました。本を読むと、登場人物の経験を体験でき、多面的に物事を考えることができる。また、これまで人間が発見してきた事実や結果をすぐに知ることができる。確かに私たちは、自分自身の経験の中での喜怒哀楽を通して、人間性を高めることも大切だと思います。また、学習、勉強し、努力することで結果を出すことも必要です。しかし、それら本を読むことで自分のものにするのが、本を読むことの素晴らしさだと思います。また、本を読み、蓄積された知恵や情報が、色々な生活の場面で化学変化をおこして自分のオリジナルの結果を導いてくれます。広い視野や懐の深い応用力を身につけることができる良い方法だと思います。何でも吸収したいと、常にアンテナを張り巡らせている柔軟な学生の時期に、豊富な本は勿論のこと、多くの情報誌や新聞、ビデオが揃ったキリ短の図書館の中で過ごせることをとても幸せに思います。あとわずかな学生生活、友と共に、青春の思い出を図書館で作りたいです。(なか あいね)

## 図書館とわたし

英語コミュニケーション学科1年 新垣 誠貨

私にとって図書館はなくてはならない存在である。図書館を利用する時間が増え、キャンパスライフがとても充実している。私は主に読書、宿題、テスト勉強、調べ物などで利用しており、何をするにしても集中できる空間だと感じている。英文法・英作文の本やTOEIC、英語検定など資格試験の本も多い。英語コミュニケーション学科の私にあった本が揃っていて役立っている。英字新聞も置かれているので、図書館を訪れた際には読む習慣をつけている。読解力をつけるためである。

図書館は学問や知識を高めるだけの場所ではない。図書館へ行くと、そこにはいつも仲間がいる。仲間と読書、仲間と勉強、会話がなくても人間関係はしっかり築き上げられている場所でもあると思う。また、いろいろな分野の本棚を回って本を探したり、ページをめくったりすることが楽しく落ち着ける場所である。大学に入学するまで、なかなか図書館を利用することがなかった私だが、図書館という場所は勉強をやったり、人とのつながりを深くしてくれたり、自分をリラックスさせる場所でもあることに気づいた。キャンパスライフの中心は図書館ライフである。利用頻度を増やしていきたい。図書館という最高の場所を最大限に生かして、人間的にも成長したいと思う。そして、図書館のすばらしさを仲間に伝えたい。

(あらかき まさたか)

## 2004年度 図書館利用状況 (2004年4月～2004年12月)

### 1. 開館日数・入館者状況

開館日数	201
入館者数	86,785

### 2. 総貸出冊数及び人数

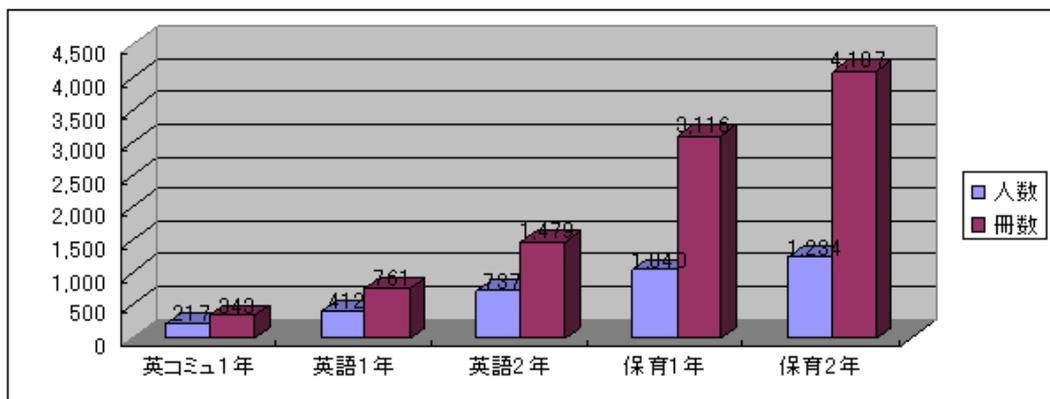
貸出人数	4,044
貸出冊数	10,626

### 3. 1日あたりの状況

1日平均利用者数	20.1
1日平均貸出冊数	52.9

### 4. 学生の貸出状況

	英コミュ1年	英語1年	英語2年	保育1年	保育2年	合計
人数	217	412	737	1,040	1,234	3,640
冊数	343	761	1,479	3,116	4,107	9,806

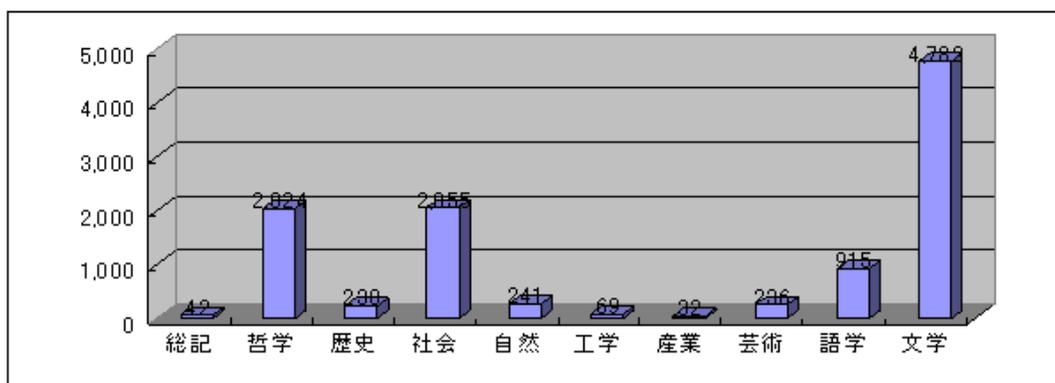


### 5. 学生・職員・学外者別貸出状況

	学生	教職員	学外者	合計
人数	3,640	173	231	4,044
冊数	9,806	389	431	10,626

### 6. 分野別貸出冊数

	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	合計
冊数	42	2,024	230	2,055	241	69	32	236	915	4,782	10,626



#### 7. 視聴覚資料貸出件数

VIDEO	カセットテープ	CD	LD	その他	合計
13	1	25	0	2	41

#### 8相互協力

##### (1)図書貸借

	貸出	借受
件数	8	6
冊数	9	6

#### 9. 文献複写利用状況

	学生	教職員
枚数	19,790	24,987

## 本学教職員の最近の著作・執筆

■ 神山繁實(英語コミュニケーション学科教授・学長)

「戦中戦後の二代のクリスチャンの歩み」『戦さ場と廃墟の中から』

日本キリスト教団沖縄教区編・発行 2004

■ 伊佐雅子(英語コミュニケーション学科教授)

「二度のアメリカ留学で感じたこと」『文化摩擦における戸惑い』国際行動学会編

創元社 2004

■ 喜友名静子(保育科教授)

第4章1節『保育所実習』民秋言[ほか]編著 北大路書房 2004

「保育実践から考える『幼児の異文化理解教育』の現状と課題～沖縄県内を中心として」『保育の実践と研究』vol.9 no.1 スペース新社保育研究室 2004

■ 大山伸子(保育科助教授)

『宮良長包著作集：沖縄教育音楽論』三木健, 大山伸子編著 ニライ社 2004

## 新規購読雑誌・購読中止・休廃刊・改題等 雑誌一覧

- 新規購読雑誌

『韓国文化』2004年7月号より

『神学思想』2004年秋号より

- 購読中止・休廃刊・改題等 雑誌一覧

『婦人公論』2005年3月まで(購読中止)

『日経WOMAN』2005年3月まで(〃)

『学校図書館』2005年3月まで(〃)

『出版レポート』2005年3月まで(〃)

『ふらんす』2005年3月まで(〃)

『うるま』2005年3月まで(〃)

『Aigo』→『さぽーと』へ改題2002年4月号より

『国際交流』→『遠近(をちこち)』へ改題2004年Oct./Nov.号より

『韓国文化』→『韓半島』へ改題2005年1月号より

『Ballet』2002年11月号まで(休刊)

## 朝日新聞記事オンラインデータベース『聞蔵(きくぞう)』

2005年度より新規導入します。1984年8月からの朝日新聞記事データが全文検索可能です。新聞のほか、「週刊朝日」「AERA」「知恵蔵」「人物データ」等が検索できます。学内LANをとおしてどのパソコンからでもアクセスできますが、1IDでの利用ですので、学内で誰か別の人が使っていると、つながりません。すこし、時間をすごして、再度アクセスして下さい。アクセス方法は、図書館ホームページよりデータベースを選択して下さい。2005年6月30日まではトライアルで、7月1日以降正式加入となります。

## レポート・論文作成の強い味方

MAGAZINEPLUS(雑誌・論文データベース)の利用方法

このサービスは学内のコンピュータからアクセスできます。

**1. 本学ホームページより図書館のページを開き、さらにNICHIGAI MAGAZINEPLUSのページを開く(検索画面が表示される)**

**2. 検索画面より、検索項目ボックスに刊行年・キーワード・著者名・雑誌名・出版社名・ISSN等を入力(いずれか1つでも可)**

キーワード・著者名・雑誌名・出版社名はプルダウンメニューで選択が可能。  
単語をスペースで区切って入力し、「必ず含む」「いずれかを含む」「含まない」をプルダウンメニューで選択すると、それぞれ「AND」「OR」「NOT」を使った検索ができる。  
間違えて入力したときなど、各検索項目ごとに付いている「クリア」ボタンで一つの項目だけを訂正することができる。入力したものをすべてを消すときには「オールクリア」ボタンを使う。

**3. ここで「検索」ボタンを押すと再検索画面に移動する。検索結果が多数になった時には絞込みを行う。**

「表示件数選択」ボタン、「表示順選択」ボタンを操作する。既定値は“20件づつ”“新しい刊行年順”になっている。

**4. 「一覧表示」ボタンを押すと一覧画面に移動する。**

検索結果が表示されますので、チェックボックスをONにし「チェックしたものを表示」ボタンを押すか、「全て表示」ボタンを押す。

**5. 詳細画面が別ブラウザで開きます。**

一文献ごとに枠組みがあり、標題、著者、誌名、抄録など各項目ごとに罫線で分けられています。必要な事項をメモしてください。新しく別の検索をするときには、詳細画面を閉じ、一覧画面に戻って検索画面(または再検索画面)のタブをクリックしてください。

---

操作上わからない事があればオンラインヘルプを利用するか、図書館職員にお尋ねください。また、利用ガイドは、

[http://www.nichigai.co.jp/database/pdf\\_guide/Nweb\\_guide.pdf](http://www.nichigai.co.jp/database/pdf_guide/Nweb_guide.pdf) よりダウンロードできます。



## 図書館はメディア・センターか？

図書館長 比嘉健次郎

夏季休暇中に「大学図書館司書主務者研修会」に参加した。図書館関連の研修に出るのは、二度目である。最初出たのは、首里の旧キャンパス時代に図書館長をしていた頃であるから、かれこれ20年以上も前のことだ。此の間、図書館をめぐる情勢もずいぶん変わった。

最も大きな変化の一つは、現代社会の急激な高度情報化に連動したもので、図書館の電子情報化への動きである。事例報告でも、班別研修でも、電子図書館、バーチャル・ライブラリー、メディアセンター、情報システム、Webサービス、電子ジャーナルなどという言葉が飛び交い、そのうち図書館という存在は、メディアセンターあるいは情報センターに吸収されてしまうのではないかという危惧さえ抱いた。メディアセンターと、名称を早々に変更した大学もあるから恐れている。

紀元前に遡るアレクサンドリア図書館以来の、「書物」の宝庫としての伝統を何とか残したいというのが私の気持であるが、こんな事を言うと、未だに「書物」を神格化していると“総括”されそうな雰囲気さえ会場には漂っていた。図書館電子化の重要性については、私とて百も承知、二百も合点だ。年々この面での充実も図っているし、公的な財政補助の要請も毎年出している。しかも、本学院の「情報センター」の長も兼ねているのだ。しかしながら、やはり、図書館を「情報」や「メディア」と安易に結びつける風潮には抵抗を覚えざるを得ない。

「情報」には、新しいか古いかという評価基準がつきまとうのが常である。古い情報など、古くなった刺身と同じで、わが身を守るためにもこれを避けるに如くはない。「情報処理」という言葉を聞くと、古くなって使えなくなった物をゴミとして処理する情景をつい思い浮かべてしまう。しかし、書物は違う。プラトンよりデリダ、『源氏物語』より『海辺のカフカ』ということはないのだ。『聖書』だって随分と古い本であるし、そもそも「バイブル」という言葉そのものが、ギリシャ語の「書物」という言葉に由来している。

「メディア」という言葉もどうも気になる。これは「媒体」という意味で、平たく言えば、情報の流れるパイプのようなものである。しかし、書物を好む者にとっては、図書館はパイプではない、むしろ、水源である。

“泉”という天然自然なメタファーの方が、図書館にはふさわしい。そこは、新鮮な水がこんこんと湧き出でる泉で、人はこれを掬って味わうことができる。

「情報」といい、「メディア」といい、どちらも工学的なメタファーである。そのせいか、電子化の進んだ某工業大学の事例報告を聞いていると、そこは学校というより、まるで工場であるかのような印象を受けた。原料として入ってきた学生を効率的に処理・加工し、付加価値をつけて、製品として出荷するという一連の情景が脳裏に去来した。

図書館は、パイプではなく、やはり泉である。太古以来の人類の知恵と知識が、幾重にも重なる深い歴史の地層を通して湧き出でる、汲めども尽きぬ泉である。

(ひが けんじろう)

## 編集後記

送り手の言葉と表情、受け手の教養とnuanceを読む感受性、その他コミュニケーションの成立にはいろいろな要素がからみあう。

書を読むこと、他人と接触することで磨かれ光る個性。大学生ならではの考えてみてはどうだろうか。四大生の貸出増を期待します。

執筆者をはじめご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。